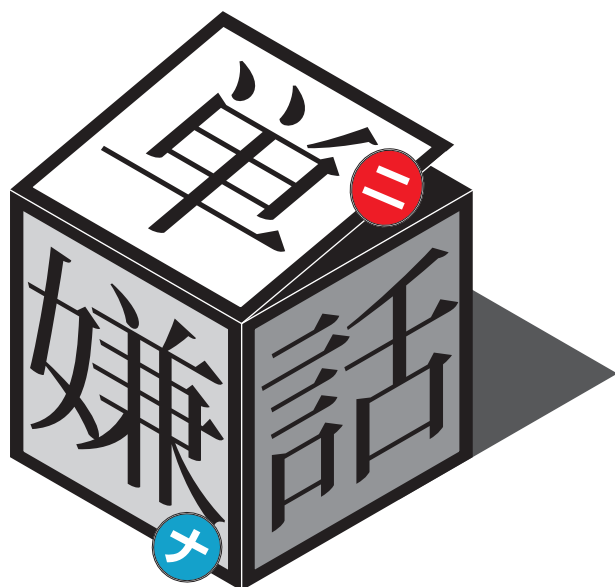


単^ニ嫌^ナ話

高田公太 発案
加藤一 編監修

虫^{むし}



虫

む し



高田公太
加藤一

発案
編監修



竹の子書房文庫

※本書に登場する人物名は、様々な事情を考慮してすべて仮名にしてあります。また、作中に登場する体験者の記憶と体験当時の世相を鑑み、極力当時の様相を再現するよう心がけています。このため、現代においては若干耳慣れない言葉・表記が登場しますが、これらは差別・侮蔑を意図する考えに基づくものではありません。

大変残念なことに本書に登場する体験談は、全て実話です。

カバー 西浦和也

卷頭言

加藤 一

蟲。虫。むし。ムシ。本書は創作怪談、ホラー小説ではないし、実話怪談でもない。いや、実話ではあるし、怖い話ではある。むしろ、生理的に嫌な話。単に嫌な話。本書の表紙は、西浦和也氏によつて本書のために描き下ろされた……というわけではない。

実を言つと、元々、「怪集蟲」（竹書房文庫）のために加藤の依頼を受けて描き下ろされたものだ。

「できさるだけ凶悪に！ ご飯食えなくなるような容赦な

いのをお願いします！ 生理的にダメな奴を全力で！」

西浦和氏はこの依頼に期待以上のものを仕上げて下さったのだが、期待の上を行きすぎた。僕はとても気に入ったけど、偉い人に「ダメだよ。これは売れないよ」と没を喰らってしまったのだ。やりすぎた——orz。

そんなお蔵入りの極めつけの表紙をご提供頂いた本書は、平たく言えば虫に関する嫌な記憶・経験を集めた、はつきり言って**誰も得しねえ本**である。

本書著者はフォロワーを減らしまくりながら書いた。良いことは何もないが、それでも読んで頂きたい。

コクゾウヌードル

高田公太

僕の中学校の数学教師がどうしてもカップ麺が食えな
いと言っていた。

その理由は一度、買ってきたカップ麺の開封したところ、中に大量の大きなアリのような虫が入っていたからだそうだ。

恐らくいつからか混入した数匹の虫が乾麺を餌に繁殖し続けたのだろう。

蓋や包装に穴があつたかは確認していない。

刺身の容器

痛田三

真夜中に台所からギチギチギチと乾いた音が響いて、おっかなびつくり確認しに行つたことがある。

特におかしなところはないものの、音はプラ用のゴミ袋からしてる。

恐る恐るそいつを覗くと、ヤツが、黒光りしたヤツが、刺身の容器を嚙^{かじ}っていた。

移動ホイホイ

竹宵亭煙鳥

玄関に設置したゴキブリ捕獲器に一匹入ったのを確認した。しめしめと思い、テレビに視線を戻す。

飲み物を持ちに冷蔵庫へと思い振り返ると、さつきよりも捕獲器が自分のほうへ近づいているような気がした。中を確認すると、たくさんのヤツらが全員で身体をばたつかせ、箱をずりずりと動かしていた。

ワインナー

竹宵亭煙鳥

テレビを見ていると視界の端で茶色いワインナーのようなものが動いている。

ごそごそと歩くそれはオオゲジゲジであつた。

驚き、咄嗟とつさの判断で近くにあつたペットボトルでそい

つを思い切り押しつぶすと、ぶちゅつとプチトマトを潰すような音がした。

辺りに飛び散った手足がまだうぞうぞと蠢うごめいていた。

風呂

痛田三

小学生 消防の頃、じよろうぐも 女郎蜘蛛をびん 瓶に集めて「蜘蛛風呂」（お湯の成分についてはノーコメントで）を作った友人は普通にピンピンしてるなあ。

触つてごらん？

須藤安寿

みなさんが蟲関連の話をしているので思い出してしまつた。

小学校のとき、知らないおじさん（やや浮浪者風）に「ほら、触つてごらん？」

とウジ虫がいつぱいの何か（↑直視できなかつたけど食べ物だつたと思う）を差し出されたときのことを……。露出狂に会つたときより怖かつた……。orz。

チョコレート味

雨宮淳司

子供の頃、蜘蛛の脚をちゅーちゅー啜っている奴いたなあ。

「チョコレートの味がする」って。

女の子だったけど。

かまきりさんの中

高田公太

ボーイスカウトキャンプ。T君は大きなかまきりさんを両手で弄んで、周囲の注目を集めていた。

「よく、そんなグロテスクなもの触れるな」

「こんなもん平気だよ」もつと目立ちたい。

彼はかまきりさんを両手で半分に引きちぎった。

「うわあ！」

彼の腕にぐるぐると長いかいちゅうさんが巻き付いてきた。

焼きトウモロコシ

加藤一

小学生の頃、クロアリをパンと弱く叩いて半殺しに、まだ息があるものを松葉に何本も刺して串に仕立て、虫眼鏡でこんがり焼いてました。

焼きトウモロコシの香ばしい香りがしてくるんで、鰻屋の隣で飯を食う感覚で匂いだけおやつにしてみました。

靴下

鯛夢

さつき部屋のカーテンにムカデを見つけたけど、取り
逃がした。(一。)

なので今靴下を履いてます。

いえ、何となく……。

授業を始めます

サデスパー堀野

小学生のときの話。級友達はH君の背中に芋虫を入れからかっていた。

半べそで暴れる彼の姿が面白かったらしい。

そこへ授業開始ベルが鳴り、女の先生が皆を教室に急かす。グズるH君にも先生は近づき、「ほら早く」と背中を叩いた。

一拍置き、二人の悲鳴が……。

直撃だったそうなの。

塀の上

痛田三

芋虫じゃないけど、そういえば。

ガキの頃は年相応に頓珍漢とんちんかんだったから、例えば塀が

あつたらとりあえずよじ登る、な残念なお子さんだった。

で、その日も自分より背の高い塀を登ろうとテツペン

に手をかけて、悲鳴を上げた。

毛虫という先客がいた訳だ。

熱帯夜

サデスパー堀野

何年か前の猛暑。極度の寝苦しさに我慢できず、夜中に目が覚める。喉も渴いたので、手探りでペットボトルを掴んで水を飲んだ。

「……？」

口元に違和感を感じ、部屋の電気を点け中を見ると、小バエが何匹か死んで浮いている。

急いで洗面所で吐いた吐瀉物としやにも、三匹ほど死骸が混じっていた。

カレーシチュー

加藤一

昔、クリームシチューを大量に作った。

一日目は美味しくいただき、二日目はカレーシチューにしよう！ と閃いて、プラスティックボトルのカレー粉を投入しようとした。

粉がダメになつてて振つても出でこないのので蓋を開けて鍋にバツて振ったら、シチューの上にコクゾウムシがたくさん浮いてた。

てのひら嫌談

高田公太

きのご狩り。

背の高い草をかき分けていると、片手に違和感がある。
てのひらを返すと、赤子の拳骨ほども尻が膨れた蜘蛛。
咄嗟に振りはらうつつもりが——思わず握り潰してしま
った。

途端、みるみる手が赤茶色に染まった。

蠢く無数の小蜘蛛が、手袋のようにその場を覆いつく
す。

ダイブ

ねこや堂

昔、女学生であつた頃の話。

木造の旧校舎にある図書館へ向かう途中、渡り廊下を歩いていて何気に欠伸をした瞬間、銀バエが口にダイブした。

吃驚^{びっくり}して思わず息を飲んでしまい、蠅^{はえ}は奥深く吸い込まれた。

何度も吐き出そうと試みるも出てこず。

流石に晩飯が食えなかった。セピア色の思ひ出。

電灯の紐

高田公太

学生時代、廃棄用の弁当をバイト先のコンビニから日々持ち帰っていた。

里帰りで一週間ほど部屋を空けた。

帰宅すると放置してあった四十リットルゴミ袋五袋から汁が床一面に溢れ、シヨウジョウバエ猩々蠅が大量にそこで水死していた。

生き残った蠅は壁で羽を休めるか、電灯の紐を一ミリ太くしていた。

枕の上

須藤安寿

思い出した蟲嫌話。

うとうととしていたら枕の上を一匹の蟻が歩いていました。

「あ、蟻だ。行列作られたら嫌だな……」

と思ったとき、視界から蟻が消え、そして数秒後、

「ごごごそつ、ごがが……!」

と、地割れが起きそうな轟音と共に耳中に激しい痛み。慌ててこそいだら耳から潰れた蟻が出てきました。

首狩り

神沼三平太

夏休みの終わりに、原っぱで同級生のK君に遭った。
アキアカネの舞う下で、「もう夏休みも終わりだね」という話になった。

「自由研究やったか？」

Kは自信たつぷりに、

「俺の自由研究は、これだぜ」

と緑や朱のビーズの連なるテグスを見せてくれた。

それはもぎ取られ、繋がれた無数のトンボの頭だった。

茶色い水たまり

神沼三平太

「冷蔵庫の電気を切って一夏放置しておくとうなるか知ってるか？」不意に先輩が言った。

「知らないっすよ」

「凄いことになるんだよ。ウジがはみ出てな。茶色い液体が冷蔵庫の下に水たまりみたいに広がって、これが臭いんだよ」「おえ」

「で、開けると、中から黒い塊がだらりとな」
そこで店長が来た。

カタツムリ

神沼三平太

「いてえ！」Sは叫び声を上げた。

今履こうとしていた靴を脱ぎ捨て、「何か入ってた」と、足の裏が痛いのか、片足で跳ねながら明かりの下に持ってきた。

二人で確認すると。巻き貝の破片が、糸を引く粘液の中で粉々になっていた。

「何これ」「たぶんこれ、カタツムリだ」

Sの靴下の裏も、ぬめっていた。

強力駆除剤

かずぷー

自室のゴキ対策として、「食べると巣に戻って死ぬ」という名目の駆除剤を仕掛けた。

後日、久しぶりに自室へ帰ると、部屋の中央にゴキがいた。

そろりと近づきハエ叩きで叩くと、ゴキは木端微塵になって四方八方へ飛び散った。

それは死後数日が経過したゴキの死体だった。

巣に戻る前に死んだようだった。

食われる

加藤 一

友人の体験談。朝、目が覚めたら口元を何かに噛まれていたんだそう。

「痛っ」と払ったら、それは大きなものが手の甲に当たって吹き飛んだ。

そこには所謂いわゆるクロGが。

つまり、唇の根元のかさかさした皮膚をGにたかられ、食われていたのだという。

お面

ねこや堂

私は蜘蛛が怖くてたまらない。

小学校に上がるまで住んでいた家は古い木造の家で、訳のわからない虫も出た。

家の外には女郎蜘蛛の巣がたくさんあった。

ある日、姉は妹がカラフルな模様の奇妙なお面を着けたまま昼寝しているのを見つけた。

近寄って思わず悲鳴を上げたという。

以来、私は蜘蛛が苦手なのだ。

自販機

寺川智人

炎天下に見つけたカップ式ジュースの自販機はオアシスに見えた。

八十円を投下してみかんジュースのボタンを押す。

抽出が終わるとすかさずカップを取り出して口を付ける。みかんっぽい風味とともに氷水が喉をくすぐる。

（あれ？）

みかんのつぶつぶだと思っていたのは蟻の大群だった。

食事の記録

おぼろちゃん

もう三十年以上前のこと。

祖母の家で八ミリを見ていると「そうそうTちゃん才カイコさん食べちゃったんだよねえ」と皆が笑う。

スクリーンでは三歳のときのTお姉ちゃんがかいこ蚕を驚掴みにして頭からかぶりついていた。

半分まで食べたところでカメラが揺れ大人の手が蚕をはたき落としていた。

バツタ鍋

おぼろちゃん

我が家は鍋物が好きだ。

まだ鍋には早い秋だがその日はすき焼きだった。

父母は会合があるので僕は妹と二人で先に鍋をつついていた。

なぜか今日に限って小エビが数匹入っている。

しばらく食べてからようやく形がおかしいことに気づいた。

窓から飛びこんできたバツタ達がよく煮えていた。

ホールインワン

おぼろちゃん

中学の理科。

蛙の解剖はなかったが昆虫を解体する授業があつた。

用意した甲虫をアルコールで殺し、まず首をハサミで
ジョキン。

そのあと腹を割いたり羽を広げてみたりするのだが、
男子がふざけて甲虫の頭を女子の筆箱にのせた。

怒った女子が払い除けると甲虫の頭がスポンとO君の
口に入った。

蜘蛛の巣

サデスパー堀野

家を出ると、玄関脇に蜘蛛の巣があつた。

何か大きな塊があるなと思つてよく見たら、小さな
かまきり蟪蛄がかかつていて、ちようど蜘蛛が重なっている。

ゲツと思つて慌てて出かけようとしたとき、突風が吹いた。

あおられた蜘蛛の巣は僕の顔に被つて壊れ、二匹の虫は僕の肩口にしがみついていた。

感觸

おぼろちゃん

目が覚めた。

喉の渴きで台所へ。まだ外は暗い。

ふと俎まないたを見ると茶色いモノが大量に蠢いている。

ハツとして明かりを点けるとそれはナメクジの大群だつた。

とは言いつつボロ屋なのでナメクジには慣れている。

棚の上の塩壺に手を伸す。そのとき体勢を崩した。

私は俎の上に手をブチュと……。

カミワザ

おぼろちゃん

小学生の頃。

母が切ってくれた梨を食べているときのこと。

ある一切れを半分囓りシヤリシヤリやりながら何気なく残った半分を見ると何やら黒い物体が貼り付いている。

よく観察するとそれは頭のない蠅だった。

うげつと口中のヤツを吐き出すと満遍なく咀嚼そしゃくされた

梨と黒いモノが出てきた。

よく見る

おぼろちゃん

皿からテーブルにこぼれ落ちたぐらいなら私は平気で食べてしまう。

ある日の夕食で野菜炒めの脇にシメジの胴体が落ちていた。我が家ではシメジをよく食うのだ。

いつものクセで私は落ちているシメジを箸でひよいとつまんだ。

口に運ぼうとしたときシメジがぐにやりと動いた。ナメクジだった。

勇姿

サデスパー堀野

その蟪蛄は道の真ん中にいた。

周囲には何もいなかったが、上段に両カマを構え威風堂々としていた。

そこへ一台の自転車を通りかかり、蟪蛄を無惨に轢^ひいていく。

再び見る。グシヤツと潰れ体液を撒き散らした下半身の上で、勇ましいポーズを取ったまま絶命した上半身が涼風に揺れていた。

常識

おぼろちゃん

地元はサクラランボの産地。

サクラランボは一口で食べるに限る。半分だけ嚙るとか輪切りにするとかとにかく中身が見えるような食べ方はNG。

サクラランボには体長数ミリの小さな白い虫が高確率で潜んでいる。やせ細ったウジ虫にも見える。

もしご存知ないと言うのなら、お暇なときに検索をどうぞ。

田舎のプール

おぼろちゃん

小学校、夏の終わりのプール。

ある子がパニックに陥っていた。

その子は口からタガメだかゲンゴロウだかわからないが、虫の尻と脚を生やして「ほっへほっへ」（取って取って）と泣いていた。

先生が吐き出させたがシヨツクで噛んでしまったようで虫の上半身はぐちゃぐちゃに潰されていた。

動く壁

ひよーじ

ある冬の朝、友人のKは家の裏手にある物置のドアを開けた。

庫内に光が射したと同時に壁が「ザザザ」と動く。

光を避けるように蠢くソレは、ひしめき合うGの大群だつたそうなの。

カツオ梅

加藤一

中学は給食がなくもつぱら弁当だった。

お袋は毎回必ず梅干しを入れていて、その日の弁当の梅干しはカツオ梅だった。ところが、よく見ると直径一ミリ、長さ一センチの棒が入っている。鰹節の欠片か、赤紫蘇^{じそ}の茎か。そう思つてつまみ出してみると、梅酢でまっ赤に染まつたミツバチが出てきた。食べるべきか悩んだのだが、一応食べずに捨てた。帰宅後、「ハチが入つてた」と言つたら「あらやだ」の一言で済まされた。



怪集 蟲

深澤夜／つくね乱蔵／松村進吉 著

加藤 一 編

<http://amzn.to/aCXt18>

竹書房文庫 定価 650 円（税込）

目次

4	巻頭言	加藤一
6	コクゾウヌードル	高田公太
7	刺身の容器	痛田三
8	移動ホイホイ	竹宵亭煙鳥
9	ウインナー	竹宵亭煙鳥
10	風呂	痛田三
11	触ってごらん？	須藤安寿
12	チョコレート味	雨宮淳司

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
電灯の紐	ダイブ	てのひら嫌談	カレーシチュー	熱帯夜	塀の上	授業を始めます	靴下	焼きトウモロコシ	かまきりさんの中
高田公太	ねこや堂	高田公太	加藤一	サデスパ―堀野	痛田三	サデスパ―堀野	鯛夢	加藤一	高田公太

32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
食事の記録	白販機	お面	カミワザ	食われる	強力駆除剤	カタツムリ	茶色い水たまり	首狩り	枕の上
おぼろちゃん	寺川智人	ねこや堂	おぼろちゃん	加藤一	かずぷー	神沼三平太	神沼三平太	神沼三平太	須藤安寿

42	41	40	39	38	37	36	35	34	33
カツオ梅	動く壁	田舎のプール	常識	勇姿	よく見ろ	感触	蜘蛛の巣	ホールインワン	バツタ鍋
加藤一	ひよーじ	おぼろちゃん	おぼろちゃん	サデスパ―堀野	おぼろちゃん	おぼろちゃん	サデスパ―堀野	おぼろちゃん	おぼろちゃん



怪集 蠱毒

創作怪談発掘大会 怪集 2009 傑作選

加藤 一 編

<http://amzn.to/9IFsR2>

竹書房文庫 定価 650 円 (税込)



単嫌話 蟲

2010 年 9 月 6 日 初版発行

2010 年 9 月 27 日 改訂第二版発行

著者 高田公太／痛田三／竹宵亭煙鳥／
須藤安寿／雨宮淳司／加藤 一／
鯛夢／サデスパー堀野／ねこや堂
神沼三平太／かずぷー／おぼろちゃん
<http://bit.ly/acKJ9q>

発案 高田公太

編監修 加藤 一

カバー 西浦和也

発行人 加藤 一

発行所 竹の子書房

<http://www.takenokoshobo.com/>

製版所 GLG 補完機構